



今回のテーマ

教師全員が主体的にかかわる工夫

授業研究には、一人ひとりの教師が主体的に取り組むことが欠かせない。授業づくりの議論が深まると共に、継続的な研究が可能となるからだ。しかし、毎年、メンバーが異なる中で、全員の意識を共有することは簡単ではない。今回は、さまざまな手立てにより全教師の主体性を引き出している事例を紹介する。

事例 神奈川県川崎市立橋小学校

研究会に「自分の視点」を持って参加

参観者も多くを学べる

「さん・かん・しゃカード」

川崎市立橋小学校は、「子ども一人一人を大切にしたい豊かな人間性を育む教育」を目指している。研究科は社会科、生活科、特別支援教育だが、石川健次校長は、全教科で一貫してすべての子どもを生かした授業づくりを目標にしていると話す。

「学級には多様な子どもがいます。目の前の一人ひとりの子どもの個性が生かされる、互いに学び合い、認め合える教育を目指しています」

研究主任の鵜木朋和先生は、授業

研究における特徴の一つとして、

日々の授業を重視することを挙げる。

「学級づくりと共に、普段の授業づくりでも目指す教育を意識することが大切だと考えています。そのため、授業研究は普段の授業を見合っている感覚で行っています。当日の授業の様子にとどまらず、『普段はどうなの?』ということもよく話し合います」

特徴の二つめは、どの教師も主体的に授業改善に取り組むために、次の手立てを取っていることだ。

■全員が年間個別研究テーマを設定

授業改善への意識が明確になる。

年度末には振り返りレポートも書く

■全員が年2回、研究授業を実施

1回目の課題を反映し、2回目の授業を改善すると共に、本当に改善できたのかを確認できる

■授業研究での「さん・かん・しゃカード」の活用(図1)

個々の研究テーマの視点も記入することで、都度の授業研究の学びが増す。協議会での議論も活発になる

■意識共有の場を多く設ける(図2)

授業づくりや、研究の考え方・方を進めていきたいと思えます」

法をこまめに伝えられ、新任者や異動者も授業研究に同じ意識で臨める

2010年度は、10月頃に、『目の前の子どもと共に』というキーワードが教師の間から自然に出てきた。この頃を境に、多くの教師が子どもの日々の変化を実感し、学校全体として主体的な雰囲気が高まってきたと教務主任の松岡広記先生は話す。

「多様な手立ての積み重ねから学校全体で取り組む雰囲気生まれると感じます。今後もその年ごとの先生方と共に、全員が参加できる研究を進めていきたいと思えます」

